

あそび 5  
2008





あゝときは船より高き卯波かな  
真砂女

あるときは船より高き卯波かな

鈴木真砂女

あを

五 月



花 梨

本三宮前

佐藤喜孝

花梨もぐあたりの雲にふれながら  
枯野の句書くにたばさむ旅靴  
水鳥の發ちたる水の呆然と  
ぢぢむさい鳥が來てゐる裸木に  
草の名のながながしきも春隣

春の藻を足にからませ潮だまり  
からだではなく気のつかれフリージア  
三月の証明写真転職す  
おことわりしてもいいかな初桜  
さくらさくら三行半を反故にする

銀座

篠田純子

千駄木 芝 尚子

茶柱が傾きかけてゐる長閑  
入端いればなの煎茶の香り春の宵  
春めきて鴉の色のなかんづく  
小面の目の奥に見る春の闇  
三楹の花や晴のち曇の日

陽に透けて谷間の紅梅あきらかに  
雪柳さえざえとして萌え立ちぬ  
道端に満作の花一問答  
白塚に積年の苔春陽なか  
物の芽の萌葱色して坂の道

宝仙寺前

芝宮須磨子

春風の堤長うして竿竹屋  
一茎にたんぽぽ一花光輪負ふ  
あたたかし簞笥の鑲に欠くるところ  
春一番花屋に足のふみ場かな  
消べき灯の春暁とぼること寂し

輪島 定梶じょう

春きざす手術の姉の笑顔かな  
病院のパジャマ姿も春の色  
鳥曇り病院の午後閑かなり  
粗衣のまま行きたしペルー春きざす  
丁寧薬缶を磨く春日和

所沢 須賀敏子

本三宮前

鈴木多枝子

屋敷跡梅一本が満開に  
桃の花濃し薄き日の下ならば  
久々に恩師に会ふや桃の花  
桃の花巨大裸婦像制作中  
桃の花脚立の上で画いてをり

枯音

青銅のキリン嘯き梅ふふむ  
踏みしだく旧宮邸の霜柱  
龍王の鱗のやうな枯木の幹  
北面の護りのごとし枝垂梅  
隈笹を撫でて枯音起さしむ

浦和

竹内弘子

蜆 汁

田端 田中藤穂

朧夜の一枚あけてある雨戸  
小糠雨さくら餅はや売り切れて  
箱根山山焼く今日を雨予報  
それぞれに抱へる余生蜆汁  
蜆汁涙おとすなおとすなよ

聖木曜神父信者の足洗ふ  
聖金曜背高き子の割烹着  
豆腐屋の喇叭過ぎゆく復活祭  
蹲踞に立寄りてゆく恋の猫  
陽炎や子育てする子と待合はす

白金 東 亜 未

仲 春

白魚も盛付けてある旬の膳  
白魚を食むひとときを黙しけり  
雛納逝きし友みな若々し  
逆らへば帽子持去る春の風  
おほいなる蓋あるごとし霾ふれり

四日市

長崎桂子

春

排気ガス一身に浴び梅咲けり  
春うらら日本語学ぶ外国人  
面構へふてぶてしくも春の猫  
春の闇湖面ただよふ鳥の群れ  
朝食は蜆汁なり海の宿

さいたま

早崎泰江

鯉のぼり

新宿 堀内一郎

曾孫生れ枯木に花を咲かせたり  
一つとや句碑はわが墓つつじ燃ゆ  
耳鳴や囀りにきて身を躲す  
初夏や胸にきらりと光るもの  
鯉のぼり深呼吸してまた泳ぐ

新宿 森山のりこ

幸せが遠廻りする桜冷  
春浅し馴染みし鈴の紐替へる  
庭桜一人占めしてティータイム  
はやばやと咲く庭桜まづ夫に  
指先に痛みが残る桜冷

## 叔父入院

上高田 森理和

青森の流しに溢る露の臺  
雛のごと温もりありぬ露の臺  
一夜干し春の豆鱒箱に群る  
露味噌や叔父の入院知らさるる  
叔父入院「おいねよう」と叔母畑返す  
おいねよう▽良くないなあ（千葉の方言）

ミモザ咲く家全体を黄に染めて  
朝霞なんの花かと近寄り  
春の朝鴉の声の間のびせり  
街中や鶯の声つゝぬけて  
抜きたての大根戸口に置かれあり

見沼 山莊慶子

佐 島

本三西

吉成美代子

江ノ島は丸い島なり海おぼろ  
手際よく天草をとる人の居て  
島裏の浜大根に春はやて  
春の海よりつぎつぎと波頭  
海風に一瞬に飛ぶ春帽子

智恵子碑

鹿手袋

渡邊友七

山茶花に暮れ色のわく無人の居  
灯を消せば凍てし睡りのわが身かも  
萌ゆる草おのが色にて日を育て  
山鳴りの智恵子碑凍てて人よせず  
母の忌や記憶に春の雪降り

外山康雄野の花館

清瀬 赤座典子

盆栽に仕立てられたる花李  
宿木の色付ける実の少なかり  
三極の花の丹頂突く子あり  
まんさくや出会ひ昔のことなれど  
花山葵清楚に描く主ゐて

三月の運勢しかと確かめん  
飾らねば雛の心の如何ばかり  
黒猫の赤いバンドナ春をゆく  
春一番風車もびつくり廻りをり  
白洲邸待ち居たるごと椿散る

桜ヶ丘 安部里子

浅 蜷

向島 遠藤 実

大浅蜷殻のもやうは伽羅百濟  
虹の根は浅蜷の住まふあのあたり  
浅蜷飯妻の味から嫁の味  
戸じまりを気にせぬ路地のおさり汁  
朝市の浅蜷の値札金釘流

鎌倉は桜の頃か鄙暮し  
囀のうひうひしくて風和げり  
麗らかや犬侍らせる太公望  
晩春や乾び藻を焼く男あり  
遠足の列呑み込んでバス重し

逗子 鎌倉喜久恵

朝獲れの潮吹く浅蜷まだ小粒  
振り向かす力凜々つくしんぼう  
その中の特にタラの芽春天井  
モーニングサービスの温泉玉子花ぐもり  
コーヒーにミルクたっぷり花ぐもり

川崎 木村茂登子

初桜余命宣告ものともせず  
初桜願ひ続けて退院す  
まだ柔し母に紅さす花の朝  
花の下遺骨となりし母とゆく  
春に逝く実母より母と呼びし人

白金 齊藤裕子



青  
巒

佐藤喜孝

繩文の蛇に圍まれ梅雨の壺

信州青巒土偶の人と竝び立つ

ふたつ身となるまで土偶立ちつくす

青梅雨や九竅全き土偶立つ

橋わたると縄文の村栗の花

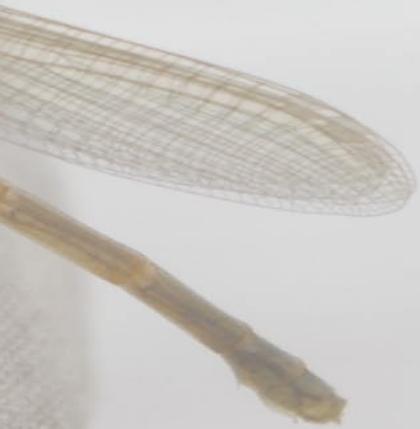
五月雨豎穴住居内からから

挨拶をどうするべきか縄文居

颱風去る森の深きに日のこぼれ

一ぴきの蟻を見盡す晝の山

郭公の一聲をもて野も山も



郭公や山を溢るる雨後の水

菱バツタ紋白蝶におどろきぬ

郭公や霧は樹間に吸ひこまれ

じごぼうや夜話いつか南極へ

夜話やとなりの人は蜂採で

白檜曾を大跨ぎして夏の霧

万緑や森中の池眞緑に

特別作品鑑賞 日脚伸ぶ 竹内弘子



佐藤喜孝

上野動物園のパンダが亡くなった。代りに中国の胡錦濤国家主席が来日、パンダの貸与のニュースが流れた。間のいい話である。「あを吟行会」で上野動物園へ行つたのは一月。その時もパンダ舎にパンダは居ず、レッサーパンダが居た。特作「日脚伸ぶ」はそのときの収穫。無季作品を散見するのは動物園といふ環境が影響してゐるかも知れない。

河馬の背に薄日の当る二十日かな  
コビトカバ油を塗つてあらはるる

河馬の句の「二十日」は「一月二十日」「二十日正月の謂いであらうが、「二十日」だけでは無理かも知れぬ。最近の歳時記は季語の数が増殖しているので「河馬」もかと調べたが、無かつた。コビトカバの肌の質感の様子を「油を塗つてあらはるる」と大胆に切取つた存在感のある作品。

### 禽獣あまた見てより風邪引きし

風邪をひいたことと動物園へ行つたことと因果関係は薄いはずだ。しかし、あまたの動物と対面するのは疲れる。動物たちは本来居るはずの地から遠く運ばれ囲はれの身である。衣食足つてゐるからといつても、見る人間は何か後ろめたいものがある。

記憶があやふやだが、どこかの動物園の檻の中に鏡があつて、「ヒト（ホモサピエンス）」という名札があつた。いや、テレビで見たのかも知れない。

### 丹頂の求愛つひに見ることなく

動物園で丹頂のディスプレイを見られるとは誰も思はない。しかし、優美な丹頂の歩みを見てゐるうちにそのやうな思ひが募つてきたのであらう。丹頂鶴も淋しいが、作者ももの足りぬことであつた。

生薬のやうにしぐれ煮冬はじめ	デイサービス初めの朝や梅一輪	赤ン坊のガーゼ真四角光る風	風通りぬけきし日差し春隣	メール打ちは孫の手解きおでん煮え	卒業す骨格模型なつかしみ	枯石路に波の碎けて城ヶ崎	羽根を突く子などあらねど羽子日和	大江戸線森下町に葉喰ひ	雪の夜のものみな遠く絵蠟燭	凍解や魔法使ひは杖をつく	畠仕事してゐるあかいちゃんちゃんこ	受験子の後姿や朝日影
佐藤喜孝	斉藤裕子	篠田純子	芝尚子	芝宮須磨子	定梶じょう	須賀敏子	鈴木多枝子	竹内弘子	田中藤穂	東亜未	長崎桂子	西本春水



前月作品

朝市の赤蕪漬に雪の舞ふ  
ゐないやうであるニホンリス遅桜  
春めくやネイルの色を替へてみる  
春いろのボタンを付けて誕生日  
冬空にぬっとクレインの突き出せり  
雨粒のごと屋根うつは寒雀  
美容院の重たき雑誌風信子  
野に出でて気持は大股日脚のふ  
車椅子の膝掛の赤梅の園  
起き抜けの顔をさらせる春障子  
洋館も茶室も春の園の内  
膝かけを揃ってかける二人かな

早崎泰江  
堀内一郎  
森山のりこ  
森理和  
山莊慶子  
渡邊友七  
赤座典子  
安部里子  
遠藤実  
鎌倉喜久恵  
木村茂登子  
山莊慶子

喜孝抄



## 四月作品より

田中藤穂

### 生薬のやうにしぐれ煮冬はじめ

佐藤喜孝

そう言われれば、生薬としぐれ煮の色は似ている。以前上野だったか本郷だったか、間口の広い漢方薬専門店があつて、幾つものガラスケースの中に生薬を入れて商っていた。どれも茶褐色なので店全体が暗くて地味な印象だった。冬はじめはまだ厳冬には間があるが、ものみな枯れ始めて、野山も街路樹も庭先も、茶色く暗い色になつてくる。

この句は全体に暗い色が染み通つていて、初冬を感じが出ている。何かつかみにくいのだけど、不思議な魅力が感じられる句だと思ひます。

### うちとけて昔語りす寒の入

斉藤裕子

「義母をいとしむ」という題の中の一句です。裕子さんはご高齢のお姑様と同居されていらつしやつたので、この義母はお姑様のことと思ひ

ます。これからますます寒くなつてゆく寒の入の日に、うちとけて昔語りをしたと、寒さなど押し返すような暖かみのある句です。そのお姑様をごく最近お見送りになられた由、亡くなられる前にそんなよい一時を持たれて本当によかつたですね。舅姑のお世話はなかなか大変ですが、後になつてみると、その中から沢山のもの戴いたような気がします。

### 泣き切つた赤子のほつぺ梅の花

篠田純子

梅の花の元気で清潔な感じと、つやつやと張り切つた赤ちゃんのほつぺが上手く響き合つて、泣きたいだけ泣いて泣き終つた元気な赤ちゃんへの溢れるような愛情が感じられます。

### 梅ほつぽくもやはらかく流れゆく

芝 尚子

言葉の幹旋、ひらがなの使い方が巧み。梅の咲き

始める頃の自然の様子が気分よく詠まれています。

## 『放浪記』有楽町は余寒かな

芝宮須磨子

待ち合せの娘を待つて有楽町の駅に立っていたら、二人連れの女の人に芸術座の行き方を尋ねられました。放浪記を見に行くのだなと思いました。須磨子さんも、余寒の日の有楽町を歩いて観にいらしたのでしょうか。

## 卒業す骨格模型なつかしみ

定梶じょう

小学五年生の頃だったか、理科準備室の隅のうす暗い所にいつも立ててある骨格の模型を、先生が教室まで運んでいらした。男の先生だったが、先生より背が高いほどの骨格模型と寄り添うように廊下を歩いてくると、骨の手足はぶらぶら揺れ動き、その上カタカタと音を立てる。模型とは言え見た目は骸骨なのだから少々気味が悪いのだが、それ以上にその揺れと音とが滑稽で、ふざけんぼの男の子などその真似をしてみんなを笑わせた。

卒業してからは一度もあの模型に出遇ったことがないが、今でも時々思い出すのである。それなので定梶さんのこの一句、しみじみと共感を覚えた。これは余談ですが、一昨年の厳寒の頃、身体を動かすと全身カタカタ音がするの、歯医者さんで「あの骸骨の模型を揺らしたような音がするんですが。」と云ったら、「今は冬で乾燥しているから、春になれば直りますよ。」とのこと。成程とそのままにしておいたら何時の間にか直ってしまいました。

## 羽根を突く子などあらねど羽子日和

鈴木多枝子

今日は風もなく暖かい絶好の羽子日和だ。お正月のこんな日、昔なら近所のあちこちから羽根をつく音や、突いている子供達のざわめきがきこえたものだ。自分も羽子板や羽根を買って貰いその子供達の中に居たのだ。時々羽根を屋根に上げてしまい、大人の人に取ってもらったりしながら。今は羽根突は誰もしなくなっただが、多枝子さんは、羽子日和の日に昔を思い出

して懐かしんでいる。子などあらねど、のあたりに強い思いが籠っている。

### 肋木に降りては融くる春の雪

竹内弘子

私の行った小学校（昭和初期）では、校庭の塀に沿って肋木が立っていた。それは水色に塗られていた。春の雪は肋木に降りかかつては積る間もなく溶けるのだ。早春の空気はまだ冷たいが、春はそこまでやって来ている。柔らかな美しい風景が目に見えてくる。

### 朝市の赤蕪漬に雪の舞ふ

早崎泰江

前書があるから高山のあの川沿いの朝市だと思う。高山の赤蕪は大きくて柔らかくて、赤の色が鮮やかでとても美味しい。ビニールの袋に入れて台の上に並べ、飛騨の小父さんや小母さんがその前にどつかと坐って商っている。高山は雪の深い所だ。舞いかかる白い雪と深紅の赤蕪漬の色彩感がなんとも美しい。

### 和三盆飾にかけて雛の菓子

森山のりこ

のり子さんは茶道の先生をなさっている。お稽古のお菓子を手作りされると前に伺ったことがあるので、この句も雛菓子をこしらえている光景かと思う。茶道にしても和菓子にしても、またいろいろな行事も、日本に伝わっているよいものをこれからも大切にしたいと思う。それにしても「あを」の大正生れの方達のお元氣なこと。いつも励ましていただいております。

### 美容院の重たき雑誌風信子

赤座典子

美容院というのは身近な所にあつて、私達をちよつと非日常の世界に置いてくれる。そこには女性向きの週刊誌など何冊も置いてあり普段見ないようなものも手に取ったりする。典子さんが取り上げたのは重たいのだから、写真集とかお料理の本とか週刊誌より立派なものだ。美容室はどこでも綺麗になっているが、店主は花好きの人が多

い様だ。典子さんが本を見ていらつしやる傍にヒヤシンスが幾鉢か置かれていて、よい匂いを放っているのだろう。ヒヤシンスは早春の花、風信子としたところがお洒落。重い本がある美容院の重厚感や典子さんの満足感が伝わってくる。

### クレソンの戦ぎ水の香たちにけり 鎌倉喜久恵

清潔感のある匂。水の香、がいい。ずっと以前だが、八ヶ岳の麓の広大なクレソン畑を見た。八ヶ岳の湧水が滔々とその畑に流れこんで、青々と育ったクレソンが水の中で戦いでいた。畑をはみ出したのを少しいただいてきて夕食の皿に添えた。

### 春屋のガラスレリーフに天使翔ぶ 木村茂登子

“あを”で吟行した都立庭園美術館での作品。明るく躍動感に溢れた作品である。旧宮邸の深い木立の道を通って館に着き、まず玄関で目に入る不透明なガラスのレリーフが私は好きだ。立姿の女性の群像に天使の羽がついていたか、不明である。館内にまだいくつも素敵なレリー

フがあるから、そちらの方だと思う。戦災を免れたこの旧宮邸は、建築、調度、庭園、みな古き良き時代の姿が残っていて貴重だ。茂登子さんのこの句は、その立派さに負けない力のある一句だと思います。

### 冬霧や列車置場のかくれけり 山莊慶子

山莊さんの家の近くに列車置場があるのだそうである。列車置場といえは相当の面積もあることだろう。そこが冬霧におおわれて何もみえない。いつもならば大きな列車が何台も置かれていたり、レールなども見えるのだろう。慶子さんもびっくりしている。東京でも何年前、スモッグがひどくて、子供達が学校へ行く時、朝なのに電車がライトをつけてスモッグの中から現れたことがあった。自動車や工場の排気ガスが規制されて今はそんなことはなくなった。ロンドンの霧も深くて一番濃い時は前をゆく車も見えないので、車はみな停ってクラクションで自分の存在を知らせながら霧の霽れるのを待つのだそうである。今はどうだろうか。

# 近世俳諧と漢詩文 27

王岩

凝粧上翠楼

およづけの物やは思ふ蝶ふたつ

東 皐



東皐は高橋氏。宝暦二年（一七五二）～文政二年（一八一九）。菅原南山に漢文を学び、俳諧は蕪村を師とし、春屋亭の別号を譲られた。蕪村没後は几董に従い、士朗・成美・月居・道彦らと交遊した。また書を能くし、東皐派の一派をなす。『東皐句集』（几董撰）があり、問題の句はここに載っている。句前の「凝粧上翠楼」は『唐詩選』に載る王昌齡「閨怨」詩の承句を短縮したものである。

閨中少婦不知愁、 閨中の少婦 愁ひを知らず

春日凝粧上翠楼、 春日 粧を凝らして翠楼に上る

忽見陌頭楊柳色、 忽ち陌頭楊柳の色を見て

悔教夫婿覓封侯、 悔ゆらくは夫婿をして封侯を覓めしめしことを

「閨怨」は樂府題で、出征などで遠くへ行つた夫を恋慕う妻の気持ちを詠む。この七絶詩の大意は、世間の愁いを知らない閨房の中の若妻が、長閑な春の日に景色を見ようと美しく化粧を施して高殿屋に上つた。遠くへ目をやると、路傍の柳が青く芽吹いているのが見える。功名を求めるよう夫を遠い戦場に送り出した自分の浅はかさを後悔した。

東皐は「凝粧上翠楼」という句題で、先ず美しく身繕いをした若い女性のイメージを浮かび上がらせた。翠楼に登つたその若い女性の視線で、睦まじく戯れながら舞い上がっている二羽の胡蝶を捉えた。その情景に触発された若い女性の発した感慨を詠んだのであろう。春野を自由自在に舞う一對の胡蝶は、ひとり、翠楼に閉じ込められた若い女性の孤独を浮彫にした。『角川古語大辞典』によると、「およづけ」は「およづく」の名詞形で、「老成、またその人」の意味である。ああ、人は老成し物思いに耽る、眼前を胡蝶はいつも連れ添つて飛び回っているではないか。下五「蝶ふたつ」は画竜点睛の妙を持っている。

# あをかき集

(六人目以降五十音順)

芝 尚子

あどけなくひとつ離れてふきのたう  
ひとり居てふたりゐるかに新茶汲む

青山の櫻並木をのぼりけり

春障子わが明け暮れや着物たたむ

かげろふや少年ふたり木の上に

田中 藤穂

お雛様飾つてありし老師の間

ぐみの実のまだ青かりし春の磯

桜鯛覗く港の鮮魚店

芝宮須磨子

春霖やフジ子のピアノ一人の夜

庭梅の咲きて今年も兄に会ふ

手作りの花見弁当過ぎし日を

突風に邪魔されてゐる花見酒

薬や初マラソンに迷ひなし

渋滞の花のトンネル和やかに

花散りて雨多き日々針しごと

ふらここや七十年代のフォークソング

鎌倉喜久恵

母に似た人に会ひけり春彼岸

藪山に細き道あり東風通る

たよりなきサーフボードよ春の海

表札のほこり払ひぬ鳥雲に

陽炎を突き刺してくる白帆かな

花粉症恋するごとく胸苦し

内側から曇る鏡やほたるいか

入船をぼうっと見やる霞かな

篠田 純子

赤座 典子

風光るジーンズはいて裏の路

安部 里子

リハビリのベッドに冬日やさしかり

鈴木多枝子

春の風鼻むづむづの虫がある

梅の香や亡き妹の生れ月

永井荷風文学館の桜咲く

雛飾りいまだに母があるやうな

桜咲く幹に手をそへありがたう

鍵かけて何か忘れる春の昼

坐禅草三郎四郎と育ち頃

遠藤 実

白梅の園に一系列毛氈

東 亜 未

定年の男坂には涅槃西風

光陰や娘桜と同一歳

花を縫ふ声の上擦り百千鳥

階をトントントンの桜の朝

デパートに順路あるらし石鹼玉

ちよつかいの猫の右足花筵

明け団子蓬の餅に粒の餡

木村茂登子

啓蟄の雲薄くなり目まぐるし

長崎 桂子

墨染の袖いっぱい春の風

春野菜賣場にあふれ見て歩く

お住持も猫も福相老の春

良い話抜げる友や梅日和

雨後の日を斜めに受けて春障子

梅林ゆるりと歩みほどけゆく

図書館へ遠廻りして花ミモザ

須賀 敏子

小鳥らし馬酔木の花のゆれやまぬ

早崎 泰江

荒川の左岸で摘みし蓬かな

咲きみちる古木の梅の空洞ふかし

片栗や転勤せし子の部屋広し

トランペットに夢中の少女卒業す

赴任する子を見送りて弥生尽

青き踏むかつて野兎居たと云ふ

啓蟄や野良猫の目にたちろぎぬ

森山のりこ

花筏緋鯉の列の続きけり

選ををへて

竹内弘子

夢の様な話が弾む万愚節

川端の若き桜の氣を貰ふ

石垣の桜の陰に懼休め

森 理和

花未だ素通りならぬ言問橋

手の甲に香余さず八朔柑

換氣扇外から廻す春疾風

蕎麦打の二の腕に居る胡蝶かな

吉成美代子

白梅の枝を放せば花こぼれ

散る桜つぎつぎ押え子犬かな

チベットに暴動のあり春嵐

魯田にせきれいの尾のゆれどほし

渡邊 友七

野仏の合掌欠けて麦伸びる

啓蟄の足舐めてものおもふ蟻

われにあらぬ目となり春の蟻追へり

母に似た人に会ひけり春彼岸

鎌倉喜久恵

先年、百五歳のご母堂をなくされた。ご姉妹で母上の両腕を抱え持つて入浴させてあげるなど、ずっとご自宅ですごして居られたそう。ご長寿で健康であつても、いつか看取りになつてゆくであろう。

物静かでふんわりした作者から、そうした氣負いのようなものは全く感じられなかった。

どの作品にも、そこはかとなく永別の氣息がうかがえ、特に私も同じ体験をした句を掲げました。

花粉症恋するごとく胸苦し

篠田純子

中七以下、何の銜いもなさそうに述べて読み手を納得させてしまうのが、作者らしいところです。一

回り以上？わかく、現役のOLですから何があっても不思議はありません。つい先頃まで、初めてのお孫さんのことで一喜一憂していたのに、と思わないでもありませんが。

ひとり居てふたりゐるかに新茶波む 芝 尚 子

「わび」「ざび」の知識がないので句会でお目にかかる以外、茶道の長老として指導にお出かけになることが多い方というイメージしかなくて、このような静謐とも言える家居の様子が新鮮でした。おひとりで居てもきりつとした感じがあります。「春障子わが明け暮れや着物たたむ」は三段で切れないようにするとよいと思います。

かげろふや少年ふたり木の上に 田中藤穂

四月下旬、田端文士村記念館へ吟行の折、やはり田端駅に近い田中藤穂さん宅に寄せていただいた。芥川龍之介が、約十年の作家生活の最後に住んでい

た家と地続きの高台である。もともと芥川が自裁したのは昭和二年。藤穂さんが結婚して此処に住まわれたのは終戦後のことで、芥川家のあつた空地に野菜やピーナツを作られたと、以前本紙のエッセイに書かれていたのを覚えている。「木の上」の「少年ふたり」は芥川家の少年達（比呂志、多加志、也寸志）か、田中家の何方かであろう。

すべては茫漠とした「かげろふ」の彼方だというふうに受取りました。

庭梅の咲きて今年も兄に会ふ 芝宮須磨子

四季の花の中で他にさきがけて咲くということから「花の兄」という別名というか雅称のある「梅」。花といえば「桜」ということになっているが、梅の觀賞された歴史は古く、昔は花といえば梅のことだった。花は白く香気がある。いまはなき兄上を偲んでおられるのだ。

薬や初マラソンに迷ひなし

赤座典子

(名古屋国際マラソン)の前書あり。

テレビ放映は注意していたけど見落した。

スタート地点では、大勢の走者が号砲を待つて、傍目には落着かないように見えるが、「迷ひなし」と見える印象の人が居られたのだと思つた。きつぱりした意志のようなものが感じられたのだと思つた。「薬」の取合せがよいと思ひました。

永井荷風文学館の桜咲く

安部里子

大正六年から昭和三十四年の惨憺たる最後までを書いた日記『断腸亭日乗』は、どこをひらいてもおもしろい本です。

死の前日は「四月二十九日 祭日 陰」とだけ。

十日前まで馴染の大黒屋で食事をしている。東京辺りと変らない市川は、葉桜の季節になっていただろうと思ひます。

花を縫ふ声の上擦り百千鳥

遠藤 実

花たちのすばらしさに春の鳥たちの声も上ずつているということでしょうか。賑やかすぎる気もしますが。俳句では桜のことを花ということでこの句の季題は「百千鳥」でしょう。

雨後の日を斜めに受けて春障子

木村茂登子

信仰の篤い方らしく、春のお彼岸に関する作品が多い中ではぱつと明るい印象でした。吟行で御住居に近い川崎大師にご一緒した時、仏道に帰依しておられる方の姿勢といったようなものを作者に感じました。

梅の香や亡き妹の生れ月

鈴木多枝子

父母きょうだいの「生れ月」は忘れないものですよです。亡くなった日でなく「生れ月」が哀切です。「梅」を見るたび思い出すのでしょうか。

## 階をトントントンの桜の朝

東 亜 未

「トントントン」が愛らしい感じなので、早く目が覚めてしまった幼児が階下へ降りてゆく図を想像しました。「桜」の咲く頃は子供でも何かはなやいだ雰囲気を感じとって、なかなか眠れなかつたり、早起きしてしまつたりするかもしれません。

## 梅林ゆるりと歩みほどけゆく

長崎 桂子

「梅林」は小高い山の裾にあることが多い。

良い香りのする梅林をゆつくり歩いて観て廻る。春にさきがけてほつほつ咲く梅の花はえも言われぬ清らかさだ。

「ほどけゆく」はつまり、気分が一新した。いわゆるリフレッシュできたということだろうと思ひました。

## トランペットに夢中の少女卒業す 早崎 泰江

「トランペット」を墓地の中で吹いていた子、荒川の堤で練習していた少年もいた。ピアノは音を消すことも出来るが、管楽器はとくに家の中で鳴らせない楽器の一つだと思う。

すてきな「少女」のイメージ。

## 夢の様な話が弾む万愚節

森山のりこ

現実にはあり得ない「夢の様な話」が、次第に盛り上がってくるらしい様子が面白いと思ひました。話の中味を知りたい気がしてきました。

## 換気扇外から廻す春疾風

森 理 和

二月の末ごろ、春の嵐が吹き荒れた。上野の駅で宇都宮線が一時間余り停つてずつと坐つたままだつた。強風のとときがあると電車が停るようになった。「換気扇」が外からの風で廻ることは十分に考えられる。

散る桜つぎつぎ押え子犬かな

吉成美代子

かわいい「小犬」の仕種がありありと見える。「散る桜」と小犬の取合せはなかったような気がする。こまかいところをよく見て作られていると思います。

野仏の合掌欠けて麦伸びる

渡邊友七

友七氏の御宅の周囲も、むかしは「麦畑」や「野仏」があつたかも知れないが、いまはすっかり都市化しているので、ふるさと福島の回想の風景かも知れないと思いました。青い麦がぐんぐん伸びている感じがいいです。

三月号正誤

冬の草干しっ放しのシャツ一枚

篠田純子

## あを吟行会のお知らせ

吟行地 目黒自然教育園

日時 6月15日(日)

出句〆切 午後2時 五句

集句場所 自由行動

句会場 白金台福祉会館

申込み〆切 6月10日

申込先 佐藤喜孝 090(9828)4244

七月 未定

三月の句会

傳 中野区 カフェ傳

春きざす姉両膝を手術せり 敏子  
 青き藻を被きて冬眠中の金魚 弘子  
 茶柱が傾きかけてゐる長閑 尚子  
 白光になほ濃淡の春の雲 喜孝  
 梅枝や天地とほく又ちかく 恭子  
 鷹山の五加育ちし二昔 理和  
 一日過ぐすべて臍に溶込みて 典子  
 梅の下みんな綺麗な雀かな 綾子  
 春炬燵上げて働きはじめけり 喜久恵  
 かげろふや少年二人樹の上に 藤穂  
 蕎麦打ちの二の腕に居る胡蝶かな美代子  
 梅の花すがりつく猫逃げる猫 純子

あを吟行会 三浦半島・佐島

青磯の香を存分に受け春の鳶 泰江  
 春の海よりつぎつぎ波頭 美代子

三月の太平洋に逢ひにきし 藤穂  
 御用邸鎮まりかへり花辛夷 弘子

手のひらに置けば寂しい桜貝 喜久恵  
 入船をぼうつと見やる霞かな 純子  
 砂になりきれぬ貝がら春の昼 綾子  
 荒磯の黒藻に混じる小蟹かな 典子  
 海までは一本の道すみれ草 喜孝

七座句会 中野・小川苑

小糠雨さくら餅はや売り切れて 藤穂  
 三椀の花や晴れ後曇りの日 尚子  
 賛美歌に亡母の書き込み花ミモザ 夏子  
 聖金曜日背高き子のカツポウ着 東亜未  
 ふはふはとさんがつをはる草薺 木枯  
 三輪車立きながら踏み春の昼 寒林  
 巻貝がごろりと倒れ春の雲 喜孝  
 冬の鳶故郷は変貌して止まず 多枝子  
 徘徊る入相時の恋の猫 恭子  
 道端にまんさくの花一問答 須磨子

連句勉強会 六月第一日曜  
 希望者は 佐藤喜孝まで  
 (090-9828-4244)

傳句会 毎月第2火曜  
 カフェ傳 森 理和  
 (03-3368-4263)

調句会 毎月第3金曜  
 岸町公民館 竹内弘子  
 (0488-86-3501)

あを吟行会 六月第3日曜  
 日黒自然教育園  
 佐藤喜孝 (090-9828-4244)

七座句会 毎月第4火曜  
 小川苑 吉弘恭子  
 (090-9839-3943)

五月の連休を利用して名古屋へ行つた。私は旅行をする機会が少ない。もちろん名古屋もはじめての地である。娘夫婦は名古屋市内の鶴舞公園で行はれるミャンマーの水祭（正月のようなもの）を主目的に。息子はトヨタスタジアムへ名古屋グランパスの応援へ、そして私たちは王岩さんに会ひにといふ多目的旅行。王岩さんは駅まで迎へに来て下さり感激した。王夫人ともお会ひできた。さういへば中国では別姓ときいてゐる。奥様のお名前を聞きそびれた。美味しい中華料理とたのしい会話で旧交を温めた。帰つてきたら半息子<sup>なか</sup>の国、ミャンマーが巨大サイクロンに襲はれ大惨事といふではないか。まだ被害の全容は分らないが、とりあへず半息子の両親、家族そして家は大丈夫と、数日後やつと通じた電話で知ることが出来た。（喜孝）

いま執筆いただいてゐる前月鑑賞を毎月楽しみにしてゐる一人である。田中藤穂さんの文は人を惹きつける。今月の定権さんの句に対する挿話をよんでみてわらつてしまつた。俳句と対話をしてゐるほんわかとした文章は

捨て難い。いつも迷ひつつ発表してゐる俳句にひと言誰かに言葉をかけていただけると句作意欲も湧くものだ。あをかき集の「選を終へて」も心のキャッチボールの一つになつてゐる。しかし、誌上だけでは十全とは行かない。時間を作り句会や吟行に参加されると進む道が見えやすいかと思ふ。私などそれで助けられてゐる。

表紙の写真は中野坂上の地下鉄改札を出た広場で撮つた。広場ではあるか吹抜けの地下なのである。地面の下から月をゆつくり見たのはこのときが初めて。（喜孝）

二〇〇八年五月号

発行日 五月九日

発行所 東京都中野区中央2・50・3

電話 090・9828・4244

佐藤喜孝

印刷・製本・レイアウト 竹徳房

カット／恩田秋夫・松村美智子

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円（送料共）／一年

郵便振替 00130・655526（あを発行所）

乱丁・落丁お取替えます。

「あを」入会ご希望の方は下記まで。

自選作品は5句（作品により添削あり）

「あをかき集」は7句投句。

普通会员 10,000（年間）

インターネット会員（冊子無し）

5,000

連絡先

[satou.yositaka@rouge.plala.or.jp](mailto:satou.yositaka@rouge.plala.or.jp)



Café 傳

中野区上高田 1-1-1

03-3368-4263